

神田遺跡・屋瀬B遺跡発掘調査報告

2 0 0 2 . 3

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県多気郡勢和村には多くの遺跡が存在しています。村内を流れる櫛田川は県内でも有数の河川の一つであり、太古の昔から豊かな恵みを受け文化が育まれてきました。

今回報告します神田遺跡・屋瀬B遺跡は、多気郡勢和村片野字神田・同村下出江に位置し、櫛田川の中流域に広がる遺跡です。広大な範囲に及ぶ遺跡の中で、平成13年度中山間地域総合整備事業（多気中部地区）に伴い、遺跡の一部が現状変更される部分の記録保存を図ることになりました。調査では、周辺を縄文時代の遺跡が多く占める中で、新たに中世の遺跡を確認しました。今回の調査成果が、祖先の残した貴重な文化財として、勢和村における郷土の歴史や文化として伝え、活用していくことを切望いたします。

文末になりましたが、調査にあたりまして多大なご協力を賜りました地元の方々をはじめ、松阪地方県民局農林商工部、勢和村教育委員会、立梅用水土地改良区、(財)三重県農林水産支援センターなどの関係各位に心より厚く感謝申し上げます。

2002年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 桂川 哲

例　　言

1. 本書は平成13年度県営中山間地域総合整備事業（多気中部地区）に伴って実施した神田遺跡並びに屋瀬B遺跡の発掘調査報告書である。

2. 神田遺跡は三重県多気郡勢和村片野字神田、屋瀬B遺跡は三重県多気郡勢和村下出江に位置している。

3. 調査は下記の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課

主任 小瀬 学、主事 黒田 勝也、技術補助員 酒井巳紀子

発掘作業委託 財団法人 三重県農林水産支援センター

3. 調査にあたっては、地元在住の各位、立梅用水土地改良区をはじめ、三重県松阪県民局農林商工部、労和村教育委員会にご協力いただいた。

4. 本書の作成は、調査第一課及び資料普及グループが行った。また、遺構・遺物の写真撮影を小瀬、黒田、酒井が行い、本文の執筆を酒井、編集を小瀬が行った。

5. 本書で示す方位は、すべて国土地理院第VI系を基準とする座標北を用いた。

6. 本書で用いた遺構表示略記号は以下の通りである。

SD : 潟 Pit : 柱穴、小穴

7. 本書で報告した記録及び出土遺物はすべて三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　　目　　次

I 前言	1	3 小結	5
II 位置と環境	2	IV 屋瀬B遺跡	9
III 神田遺跡	4	1 層位と遺構	9
1 層位と遺構	5	2 遺物	9
2 遺物	5	3 小結	9

挿　　図　　目　　次

第1図 遺跡位置図	3	第6図 遺構平面図	6
第2図 遺跡地形図	3	第7図 調査区北壁上層断面図	6
第3図 調査区位置図	4	第8図 遺物実測図	9
第4図 調査区座標位置図	4	第9図 調査区位置図	10
第5図 遺物実図図	5	第10図 遺構平面図、調査区北壁上層断面図	10

写真図版目次

図版1 調査前風景	7	図版3 調査前風景	11
図版1 A地区全景	7	図版3 調査区全景	11
図版2 B地区全景	8	図版4 調査区全景	12
図版2 出土遺物	8	図版4 出土遺物	12

表　　目　　次

第1表 遺物観察表	5	第2表 遺物観察表	9
-----------	-------	---	-----------	-------	---

I 前 言

1 調査に至る経過

神田遺跡は、多気郡勢和村片野字神田に所在し、勢和村遺跡番号33の周知の遺跡である。当遺跡は、平成13年度県営中山間地域総合整備事業（多気中部地区）が実施されることになり、範囲確認調査を行うことになった。調査では、総面積約32,000m²を対象に65カ所の範囲確認坑（以下、確認坑と示す）を設定し、実施した。その結果、約8,125m²について遺構が存在しているものと判断した。

屋瀬B遺跡は、多気郡勢和村下出江に所在し、勢和村遺跡番号103の周知の遺跡である。当遺跡は、神田遺跡と同様に範囲確認調査を行うことになった。調査では、総面積約780m²を対象に8カ所の確認坑を設定し、実施した。その結果、約400m²について遺構が存在しているものと判断した。

これらの結果を基に関係部局との協議の結果、事業に伴い保存不可能な部分について調査を実施し、記録保存することとなった。

2 神田遺跡の調査経過

（1）調査経過

神田遺跡の発掘調査は平成13年8月1日から開始し、同年同月10日に終了した。調査面積はA地区が約68m²、B地区が約22m²であった。

（2）調査日誌（抄）

- 8月1日 重機による表土掘削開始。
8月2日 表土掘削。排水作業。
8月6日 小地区設定。
8月7日 作業員初日。
8月8日 遺構掘削。遺構清掃。遺構写真撮影。作業終了。
8月9日 遺構実測。
8月10日 遺構実測。調査終了。調査区埋め戻し。
8月13日 現地引き渡し。

3 屋瀬B遺跡の調査経過

（1）調査経過

屋瀬B遺跡の発掘調査は平成13年8月13日から開

始し、同年同月15日に終了した。調査面積は約35m²であった。

（2）調査日誌（抄）

- 8月13日 重機による表土掘削開始。
8月14日 作業員開始。遺構検出、掘削、清掃、写真撮影。作業終了。遺構実測。
8月15日 遺構実測。埋め戻し。
8月16日 現地引き渡し。

4 調査の方法

（1）調査区の設定

調査区は、2地区に分かれており、東方をA地区、西方をB地区とした。そして、調査区を4m四方の升目で区切り小地区を設定した。西から東へアルファベット、北から南へ数字を付け、升目の北西隅の交点をその符号とした。

（2）遺構図面

調査区全体の遺構平面図及び土層断面図は、縮尺1/20で実測した。土層断面図の土色は、『新版標準土色帖（1999年版）』を使用した。今回は、土坑・溝等で良好な遺物出土状況を伴うような遺構が存在しなかったため、縮尺1/10の個別実測図は作成していない。遺構等の写真撮影は、6×7cm版（モノクロ、カラーボジ）と35mm版（モノクロ、スライド）を使用した。使用したカメラは、アサヒパンタックス6×7、ニコンF M 2、ウイスクSP（6×7）である。

（3）掘削方法

表土は、重機掘削し、遺構を人力掘削した。

II 位置と環境

神田遺跡（1）は、多気郡勢和村片野字神田に所在する。当遺跡は、櫛田川中流域右岸の河岸段丘上に位置している。

屋瀬B遺跡（2）は、多気郡勢和村下出江に所在する。当遺跡は、梅田川中流域左岸の河岸段丘上に位置している。勢和村内には100以上の遺跡が存在し、この段丘面には多くの遺跡が存在している。その半数以上は縄文時代の遺跡が占めている^①。

以下では、本遺跡の時期と同時期と推定される古代から中世の周囲の遺跡を概観していきたい。

古代から中世にかけて、丹生古谷水銀採掘坑跡群（3）や丸山口水銀採掘坑跡群（4）を中心として180余りの水銀採掘坑跡が見つかっている^②。丹生水銀は、「統日本紀」「文武天皇二年（六九八）九月二十八日条」で伊勢国から朱砂と雄黄が献上されたという記述がある^③。それ以降、丹生水銀は古代・中世を通じて開発され、史料の記述が少なくなる室町時代頃まで採掘が行なわれていたものと思われる。丸山口水銀採掘坑跡群からは、石製打削具や辰砂の沈着した石が出土している^④。村内では、現在でも

各所に採掘坑跡を見ることができる。

中世の遺跡は、若宮A遺跡（5）で30基以上の土坑が検出され、規則性を持たない礪群を伴った土坑や砂礪を伴った土坑等が確認されている^⑤。また、多量の南伊勢系鍋、磁器の付着した甕、石臼が出土し、水銀生産とかかわっていた遺跡の可能性が推定されている。アカリ遺跡（6）では鎌倉時代と室町時代の掘立柱建物や区画溝と思われる断面V字形の溝が見つかっている^⑥。縁通庵遺跡（7）や畠ノ上遺跡^⑦（8）、井尻遺跡^⑧（9）では掘立柱建物が見つかっている。松葉遺跡^⑨（10）では、鎌倉時代から室町時代の溝が見つかっている。その他にも本遺跡周辺では、大川原遺跡^⑩（11）・新神馬場遺跡^⑪（12）から山茶碗や土師器が出土している。

城館は、五箇篠山城跡（13）、五箇篠山羅城跡（ひよどり城跡）（14）、波多瀬城跡（15）、が築かれている。五箇篠山城跡は南北朝時代に南朝方の拠点城郭の一つとして築かれ、戦国時代末頃に軍事的な改修がされたと考えられている^⑫。

【註】

- ①『三重県勢和村遺跡地図』勢和村教育委員会、1995年
- ②前掲①文献
- ③その他に『延喜式』『今昔物語集』にも水銀に関する記述が見られる。
- ④小演学「近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ」三重県埋蔵文化財センター、2000年
- ⑤伊藤裕作「『多気郡勢和村 丹生地区内遺跡群』『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第1分冊一』三重県教育委員会、1989年
- ⑥松葉和也『縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1999年
- ⑦前掲⑥文献
- ⑧宮田勝功「『多気郡勢和村 畠ノ上遺跡』『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第1分冊一』三重県教育委員会、1989年

⑨西村美幸他『井尻遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1996年

⑩『三重県埋蔵文化財センターワン報6』三重県埋蔵文化財センター、1995年

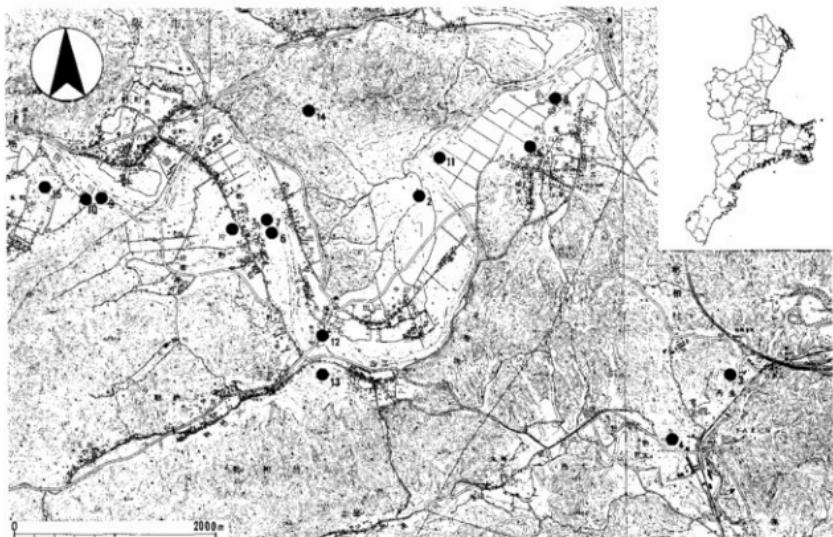
⑪前掲⑤文献

⑫前掲①文献

⑬小林秀「附Ⅲ 五箇篠山城跡」「勢和村遺跡地図」勢和村教育委員会、1995年

【参考文献】

- ・下中邦彦編『日本歴史地名大系第二四巻 三重県の地名』平凡社、1983年
- ・『わたしたちのふるさと勢和』三重県多気郡勢和村、1995年
- ・『三重の中世城館一開発集中地域中世城跡分布調査報告一』三重県教育委員会、1976年
- ・『勢和村史 通史編』勢和村、1999年



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

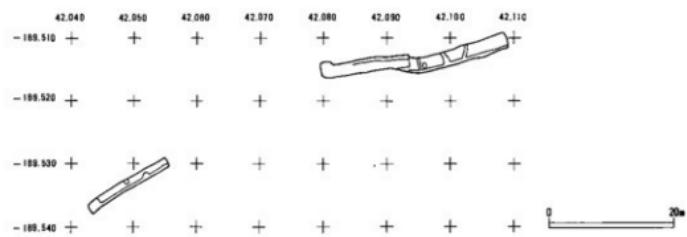
(国土地理院・横野・1 : 25,000)



第2図 遺跡地形図 (左: 神田遺跡、右: 屋瀬B遺跡) (1 : 10,000)『勢和村遺跡地図』(1 : 5,000)から



第3図 調査区位置図（1：2,000）



第4図 調査区座標位置図（1：800）

III 神田遺跡

1 層位と遺構

(1) 層位

本遺跡の現状は水田であり、周囲にも水田が広がっている。基本層序は、上から第1層耕作土、第2層黒褐色土(2.5Y 3/1)、第3層黒色砂質土(7.5Y 2/1)、第4層灰オリーブ色砂質土(5Y 4/2)である。第4層の上面が遺構検出面である。

A、B両地区は丘陵の斜面上で高低差等から多少土層の堆積状況は異なるが、基本的に同じ土層が確認されている。

(2) 遺構

A 地区

当地区は、溝3条と柱穴11ヶ所を検出している。溝はすべて南北方向に延びている。遺物は細片のみ、詳細な時期は不明である。

B 地区

当地区は、柱穴4ヶ所を検出している。遺物は細片のみで詳細な時期は不明である。

2 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして1箱ときわめて少量であり、細片であるため、遺跡の時代を決定するのに困難である。そのため範囲確認調査で出土した遺物を当遺跡の出土遺物として取り扱った。

(1) 鎌倉時代の遺物

1は、山茶碗の底部片であり、藤澤編年^①の概ね第6型式に比定される。

(2) 室町時代の遺物

2は、南伊勢系の土師器鍋で伊藤編年^②の第4段階d型式に比定される。

(3) 近世の遺物

3は、常滑焼の陶器でいわゆる赤物と呼ばれている火鉢の口縁部である。

3 小結

今回の調査では、溝3条と柱穴15ヶ所を検出したのみであった。これらの遺構には、遺物が細片のため詳細な性格や位置づけ等を明らかにすることができなかった。しかしながら、当遺跡内の範囲確認調査の結果から弥生時代^③だけでなく中世の遺構の広がりも確認した。

【註】

①藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年

②伊藤裕作「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号、三重県埋蔵文化財センター、1992年

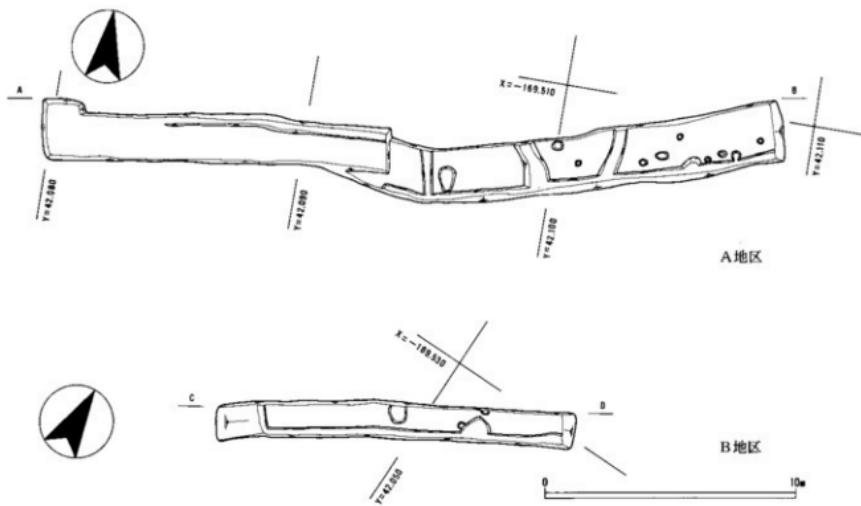
③『夢和村遺跡地図』勢和村教育委員会、1995年



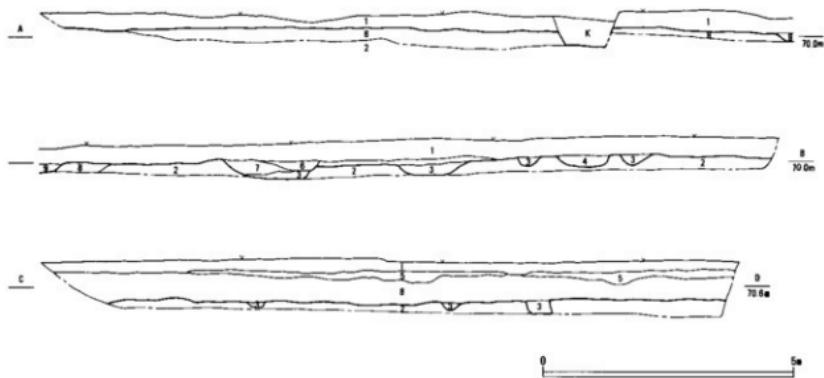
第5図 遺物実測図 (1 : 4)

番号	質地 形状	器種	器種分類	出土位置	法面(m) 口径 底径 高さ	調査技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1 001- 01	陶器	山茶碗	60		7.8	外:オクロナデー粘付け高台一系切り底 内:ロクロナデ	やや 良	灰白2.5Y7/1	底部1/4		
2 001- 02	土師器	鍋	50			口縁部ココナデ	良	外:にぶい黄褐色10YR7/3 内:にぶい黄褐色7.5YR8/4	口縁部片		
3 001- 03	陶器	鉢	37	15.3		外:ロクロナデ 内:オサエー・ロクロナデ	やや 良	にぶい赤褐色2.5YR8/4地 口縁部片			

第1表 遺物観察表



第6図 遺構平面図(1:200)



- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 耕作土 | 6. オリーブ黄色砂礫混土 |
| 2. 灰色オーリーブ色砂質土 | 5Y 4／2 |
| 3. 黒色砂質土 | 2.5Y 2／1 |
| 4. 灰色砂質土 | 7.5Y 4／1 |
| 5. 黒褐色土 | 2.5Y 3／1 |
| | 6. オリーブ黄色砂礫混土 5Y 6／3 |
| | 7. 灰色オーリーブ色砂礫混土 5Y 5／2 |
| | 8. 黒色砂質土 7.5Y 2／1 |
| | 9. 灰色土 7.5Y 5／1 |
| | K. 范圍確認坑 |

第7図 調査区北壁土層断面図 (1:100)



調査前風景（北から）

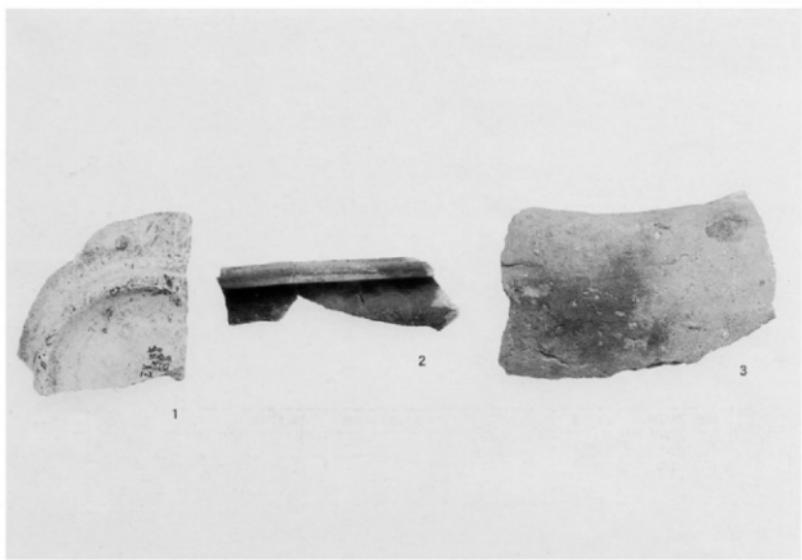


A地区全景（東から）

図版 2



B地区全景（東から）



出土遺物

IV 屋瀬B遺跡

1 層位と遺構

(1) 層序

本遺跡の現状は水田であり、周囲にも水田が広がっている。基本層序は、第1層道路（盛土、細石含む）、第2層黒色土（7.5Y 4/2）、第3層暗灰黄色砂混土（2.5Y 4/2）である。第3層の上面が検出面である。

(2) 遺構

柱穴16ヶ所を検出した。また調査区中央を東西に走る溝は、地元の方の話によると昭和30年頃まで使われていた用水路であったらしい。

2 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして1箱ときわめて少量であり、細片であるため、遺跡の時代を決定するのに困難である。そのため範囲確認調査で出土した遺物を当遺跡の出土遺物として取り扱った。

(1) 綱文時代の遺物

1は、打欠き石錐である。長さ5.4cm、幅5.6cm、重さは101.5gである。両端を打欠いている。確認坑のG 3から出土した。

(2) 室町時代の遺物

2は、擂鉢の口縁部でやや丸みを帯び、鉄釉がかかれている。3は擂鉢の底部で、外側をケズリで調整した後、鉄釉をかけている。共にG 6から出土した。

3 結語

今回の調査では、柱穴を検出したが掘立柱建物へと結びつくような遺構までは確認できなかった。そして遺物は希薄であるものの、今回の調査及び範囲確認調査の結果から当遺跡には中世の遺構が存在すると同時に屋瀬B遺跡の範囲が東へ広がる可能性があると考えられる。



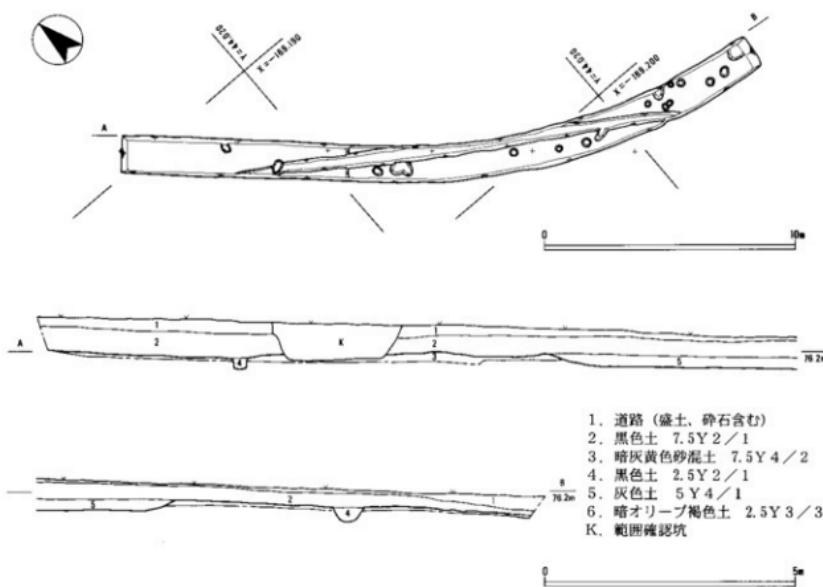
第8図 遺物実測図 (1 : 4)

番号	遺物番号	基種	器種分類	出土位置	寸法(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	底径	高さ						
1	001-02	石器	打欠き石錐	G3	盛土中	5.35	5.5	2.5				完存	
2	001-02	陶器	擂鉢	G6	盛土中				外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	黒褐7SYR4/2地 口縁部片	
3	001-01	陶器	擂鉢	G6	盛土中				外:ロクロケズリ 内:クシ3本/cm	やや 密	良	黒にびい赤褐7SYR4/3 底部片	

第2表 遺物観察表



第9図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第10図 遺構平面図 (1 : 200), 調査区北壁土層断面図 (1 : 100)



調査前風景（南から）

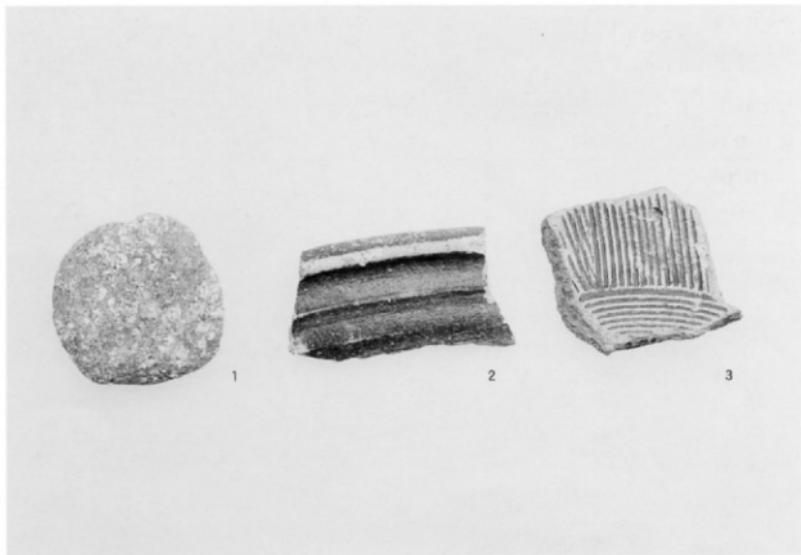


調査区全景（東から）

図版4



調査区全景（西から）



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こうだいせき・やせBいせきはっくつちょうさほうこく				
書名	神田遺跡・屋瀬B遺跡発掘調査報告				
副書名					
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告				
シリーズ番号	231				
編著者名	小濱 学・酒井巳紀子				
編集機関	三重県埋蔵文化財センター				
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732				

発行年月日		西暦2002年3月29日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市	町村	遺跡番号	○○○			
こうだいせき 神田遺跡	三重県多 気郡勢和 村片野	24444	33	136° 27' 18"	34° 28' 19"	20010801 20010813	90	中山間地 域総合整 備事業
やせBいせき 屋瀬B遺跡	三重県多 気郡勢和 村下出江	24444	103	136° 28' 42"	34° 28' 24"	20010813 20010816	35	中山間地 域総合整 備事業
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
神田遺跡		中世		溝、柱穴		土器		
屋瀬B遺跡		中世		柱穴		石器、陶器		

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 11 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 231

神田遺跡・屋瀬 B 遺跡

2002. 3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 沢第一プリント社
